

文語日誌（平成二十七年十月二十六日）

「和歌・漢詩 明治維新百人一首」

三省堂八階の催物會場にて年に數回開催せらるる古書市にて購入す。

不二歌道會編、昭和四十一年刊の新書版なり。昭和四十三年の明治維新百年祭に先立ち、奉祝記念事業として編纂せられ、神社本廳の學術獎勵基金一封を受けたる由。和歌の部百名、漢詩の部百名。重複したる人物あり、和歌と漢詩雙方に登場する人物は五十二名に及ぶ。

以下に特に印象に残りたる作品を引用せむ。

吉田松陰（天保元年、一八三〇年生れ。安政六年、一八五九年歿。享年三十）の和歌、

留魂録の冒頭に掲げらる。

『身はたとひ 武藏の野邊に朽ちぬとも 留め置かまし 大和魂』

吉田松陰の漢詩、絶命詞なり。

『吾今國の爲に死す 死して君親に負かず 悠々たり天地の事 觀照は明神に在り』

西郷隆盛（文政十年、一八二七年生れ。明治十年、一八七七年歿。享年五十二）の和歌、

『上衣はさもあらばあれ 敷島の大和にしきを心にぞきる』

西郷隆盛の漢詩、文久三年沖永良部島謫居たくきよの作。

『朝あしたに恩遇を蒙り夕ゆふに焚坑せらる 人生の浮沈晦明に似たり 縦たどひ光を回らさざるも
葵あひむは日に向ふ 若し運を開くなきも意は誠を押す 洛陽の知己皆鬼となり 南嶼なむしよの
俘囚ふしう獨り生を竊ぬすむ 生死何ぞ疑はん天の附與なるを 願はくは魂魄を留めて皇城を護
らん』

久坂玄瑞（天正十一年、一八四〇年生れ。元治元年、一八六四年歿。享年二十五）の和歌、

『秋ふかみ 牡鹿の角のつかの間も千千にくたくる 我がおもひかな』

久坂玄瑞の漢詩、無題。

『去年海内亂れて麻の如し 生死期せず 詎なんぞ家を憶おもはん 此の夕べ蕭條として限り
無きの恨み 山堂の春雨鳴蛙めいあを聴く』

蓋し、日本人は傳統的に表現手段として和歌・漢詩の兩方を上手く使ひ分けて來たるに、之を能くする人の尠き今日、改めて思ひを新たにす。

（平成二十七年十一月十日受附）

